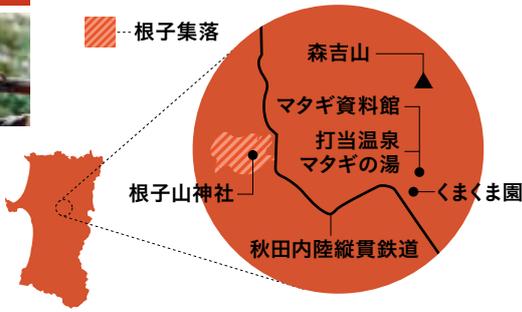


AKITA



阿仁マタギ (提供: 北秋田市)



列島の狩猟史

寛永19(1642)年	寛永の大飢饉(~寛永20年)
寛永21(1644)年	「マタギ」の初出。『南部(盛岡)藩雑書』に熊胆と毛皮を上納した記載。表記「またき」
寛文4(1664)年	「マタギ」の記事。『弘前藩庁御国日記』寛文四年閏五月六日の条、ハイタカの幼鳥を上納。表記「またき」
延宝8(1680)年	「諸国鉄砲改め」の拡大。在村鉄砲数の把握と鳥獣害対策の威し鉄砲と猟師鉄砲の分化。鉄砲取締の強化
元禄6(1693)年	『盛岡藩「雑書」』元禄六年四月七日の条、「又木」の記載あり。又木は公認された猟師、狩猟者を指した
享保18(1733)年	~延享2(1745)年頃、西日本に狂犬病上陸。野生オオカミに感染。各地でオオカミ騒動が起こり、野犬とオオカミの駆除が始まる
天明3(1783)年	天明の大飢饉。この頃、秋田マタギによる伝統的出稼ぎ狩猟「旅マタギ」の発生
寛政12(1800)年	米沢藩の覚書に「旅猟師」の記載あり
享和3(1803)年	『弘前藩庁御国日記』に秋田の猟師と村人が「ヒラ」をつくり、クマを捕獲した記載あり
嘉永2(1849)年	秋山郷鷹鷹山山中に秋田佐竹侯の狩人4、5名が猟をしているとの訴えあり
嘉永4(1851)年	「会津只見文書」に「羽州秋田荒瀬村猟師 万太郎組三人 羽州秋田猟師男五人組 三九郎組」の記載あり
明治6(1873)年	鳥獣猟規則(太政官布告)。ホンドリタチが津軽海峡を越えて北海道に繁殖。エゾシカ55000頭が捕獲される
明治17(1884)年	火薬類取締規則(太政官布告)。村田銃の民間払い下げ開始。海外への武器輸出へ
明治19(1886)年	陸軍被服本廠設立。軍用毛皮の収集機関の設立
明治22(1889)年	この頃、エゾオオカミ絶滅(害獣駆除による)
明治28(1895)年	狩猟法公布
明治37(1904)年	日露戦争が勃発。毛皮市場の形成期。この頃、ニホンオオカミ絶滅(害獣駆除による)
大正4(1915)年	この頃、輸出用・軍用毛皮の需要大(野生鳥獣の減少)
大正7(1918)年	狩猟法改正。狩猟対象鳥獣を指定し、それ以外を保護鳥獣とした。農林省、各県警察部に狩猟係を配置
昭和4(1929)年	毛皮資源、野生種から飼育種へ漸次移行
昭和11(1936)年	国内毛皮需要(輸出・軍用)のピーク
昭和12(1937)年	10月13日、ラジオ放送で全国の狩猟者へ陸海軍による軍用防寒毛皮の萬集への協力を要請
昭和16(1941)年	毛皮輸入禁止令(昭和37年まで)。この頃、本州においてニホンカワウソ絶滅(毛皮輸出による)
昭和24(1949)年	新潟県三面集落の伝統的カモシカ猟スノヤマ中止
昭和32(1957)年	「旅マタギ」が完全に姿を消す
昭和33(1958)年	狩猟法一部改正。伝統的な重力式銃の使用禁止
昭和38(1963)年	狩猟法を「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」に改称改正

資料提供/田口洋美

講師: 田口洋美氏



昭和32年、茨城県生まれ。平成2年「マタギサミット」主宰。17年東京大学大学院新領域創成科学研究科博士課程修了、博士(環境学)。同年より東北芸術工科大学教授。『クマ問題を考える』(ヤマケイ新書)、『マタギ森と狩人の記録』(慶友社)など著書多数。



深まる一冊

ヤマケイ文庫 新編 越後三面山人記
田口洋美著(山と溪谷社)

昭和60年、ダム計画で閉鎖された新潟県三面集落。旅マタギが始まりと伝わる集落の山の民に密着し、四季折々の暮らしを綴った記録。



主催: 一般社団法人東北観光推進機構、東日本旅客鉄道株式会社 後援: 秋田県、公益財団法人東日本鉄道文化財団

AKITA

秋田

第7回 第2部

いま求められる “旅マタギ”

狩猟の民はなぜ山を越えたのか



2019.11.16(SAT) 16:30

マタギの道具(碧祥寺博物館蔵) 写真提供/遠野市立博物館

いま求められる“旅マタギ” 狩猟の民はなぜ山を越えたのか



熊が家畜を襲う被害に悩んでいた鹿角市の一家が阿仁マタギに協力を仰ぎ、熊狩りを行った時の記念写真(マタギ資料館蔵)



古くから、消化器系の万能薬として重宝された熊の胆(マタギ資料館蔵)

1 明らかになってきた旅マタギの実態

北秋田市の阿仁地区は古くからマタギの里として知られる。熊の巻き狩りをはじめ、独特な狩猟技術が今に伝えられているが、この地の狩猟の民たちは近代以降、盛んに旅マタギに出た。旅マタギとは、いわば出稼ぎ狩猟である。交通網の発達によりその範囲は、南は近畿地方、北は樺太にまで及んだ。旅マタギは、江戸時代の中期ごろにはすでに存在していたと考えられる。ただ、マタギの文化は多くの伝承が残されているものの文献資料が乏しく、長い間その裏付けが難しかった。しかし近年、古文書の発掘や、各地に伝わる狩猟の技術と作法などの比較研究により、伝承が少しずつ裏付けられてきている。



重要有形民俗文化財である阿仁マタギの狩猟用具(北秋田市蔵)

2 旅マタギを生んだ獣害と罾猟の技術

秋田(阿仁)マタギというと、鉄砲で狩りをする姿がイメージされる。しかし、それは村田銃が普及した明治の中期以降のことだ。本来、彼らが得意としていたのは、主に罾と槍(山刀)による罾だ。江戸時代は有史以来、最も山林面積が減少した時期である。そのため各地で獣害が起きた。ニホンオオクマ捕獲用の罾「ヒラオトシ」の再現(写真提供/東北歴史博物館)



カミによる被害も深刻で、人に伝染する狂犬病も恐れられた。そこで注目されたのが、罾に長けたマタギの狩猟技術だった。彼らは各地から乞われて害獣駆除に赴いた。さらに天明の大

飢饉後、秋田で物価が30倍にも跳ね上がったのを機に、彼らは生きるため、積極的に旅マタギになるようになる。狩猟技術を欲しがると先づきの地に定住した者も少なくない。そして旅マタギを通じ、熊の胆や毛皮などの自前の産品ばかりではなく、例えば会津漆器など、富裕層を相手とする他産品の行商をもする独特の商業システムをつくり上げていった。

3 人と自然との距離を保つ 狩猟の役割

今の日本は有史以来、森林率が高い時代である。しかし、山はかつてのような生産の盛んな場所ではなくなり、多くの山林が放置されている。太平の世が続いた江戸時代には、幕府の政策もあって罾師



熊の毛皮や熊の胆は、マタギの大きな収入源だった(マタギ資料館蔵、写真提供/北秋田市)

の数が激減したが、現代も同様に罾や林業に携わる人が少ない。そして獣害が深刻な問題となっている。マタギは古来、山に学び、野生動物の行動を熟知し、山で生きる術を連綿と蓄えてきた人々である。また、旅マタギによる他所への技術の移転は各地の狩猟技術を活性化させた。そして狩猟には、野生動物を集落から退け、適度な距離を保つ役割も



阿仁マタギの里として知られる根子集落(写真提供/北秋田市)

あった。しかし、今は行き過ぎた野生動物の保護と、狩猟者の減少・高齢化、狩猟技術の衰退などの要因により、自然との距離の取り方も崩れてしまっている。今こそ、あらためてマタギという存在が果たしてきた役割に目を向け、長く培われてきた知恵と技術を見直す時なのである。